

「心中天の網島」考

——紙屋治兵衛の自覚と「女同士の義理」——

早 川 久 美 子

(一) はじめに

近松作「心中天の網島」の男主人公、紙屋治兵衛は和事の二枚目の代表例とみなされている。しかしながらこれまでの研究では一般に治兵衛は小春・おさんという二人の女主人公に比べて描けていないと捉えられてきた。

たとえば重友毅^①は作中人物の思慮分別の有無を重視して、治兵衛は「上・中之巻で脇役でしかなかった」が、下之巻に至って初めて主役の立場に立つとのべている。廣末保は主人公の主體的な行為や葛藤に注目しようとした「世話悲劇」論を説いているが、その観点より本作上・中之巻では「女同士の義理」に関するおさん・小春の行為が重大であるとし、治兵衛については「殆んど、小春とおさんの行為のままにしか動きえなかった」という。そしてそれだけに下

之巻では治兵衛を書かねばならなかったともいう。

白方勝^③は「義理の悲劇」に焦点をあてて「おさんと小春の間の女同士の義理が、この作品の主要な葛藤となっている」と見、下之巻においても治兵衛はその義理に対して「第三者的」であるとのべている。

ところが近松座を結成し、その舞台で常に治兵衛役を演じる中村鴈治郎は研究者たちとは違う捉え方を示している。彼は原道生との対談^⑤で近松作品の「運命」についてふれ、

女のほうがよく書けるとか、女のほうを深く近松は書いているんだ、とか、よく言われるけど、そうじゃない、そうじゃないんですよ。治兵衛の心理が書いてないとか言われるけど、そうじゃない。やってる人間が一番よくわかるんです。女の間を深く深く書けば書くほど、相手の男の人間が今度は運命に

操られているというか、どうにもならない運命の中に生きていくことが、何も言わなくてもね。流れていく男のことが、よく書ける、よくできてるんですよ。

という。そして彼は治兵衛と「けいせい仏の原」における坂田藤十郎ではせりふの間や息などが一緒であるとのべ、原はそれを受けて近松浄瑠璃と歌舞伎のやつしとの関連を示唆している。

筆者は治兵衛が描けているか、否かをあらためて検討する必要があると考える。そもそも近松世話浄瑠璃の男主人公はよく知られている通り、一般に歌舞伎でやつしの芸脈を引く男主人公をモデルとして生み出されている。そこで原^④はまた「やつし」の浄瑠璃化——煙草売り源七の明と暗——のなかで歌舞伎役者のやつし芸を取り入れたやつし的主人公を取り上げ、その造型の特徴と推移を明らかにした。このやつし的主人公と治兵衛との関係についてはこれまでまったくふれられていないので検討の余地があると思われる。さらにまた、近松晩年の世話浄瑠璃に目を向けるとそこには鍾の権三・河内屋与兵衛・八百屋半兵衛などといった特色ある男主人公の活躍が目立つ。このような傾向を見てもここで治兵衛の人物像に新たな評価を与えることは近松世話浄瑠璃の方法を解明するために有効な手がかりとなるであろう。

本稿では原論文に導かれつつ、やつし的主人公が活躍する世話浄

瑠璃の筋の展開を考察するところからはじめたい。

(二) 世話浄瑠璃とやつし的主人公

原論文^⑦によれば、浄瑠璃に描かれたやつし的主人公はまず比較的近接した時点で当りを取った特定の歌舞伎役者のやつし芸をそのまま浄瑠璃の中に取り入れることをねらって描かれたものであり、その手法は宝永年間を中心に、元禄十年代から正徳初年時にかけての時期に数多く見受けられるという。そして世話浄瑠璃の例として「丹波与作待夜の小室節」中・下之巻、「淀鯉出世滝徳」下之巻、「夕霧阿波鳴渡」上・中・下之巻をあげている。

まず「丹波与作待夜の小室節」から中之巻以降の筋を確認する。

中之巻

- (ア) 関の宿白子屋では関の小万が同輩より伊達与作のよくない噂を聞かされ思い沈む。与作は元は武士の身分であった。
- (イ) 馬方姿の与作は博奕の借金を抱えて馴染みの小万を訪れる。
- (ウ) 石部八蔵がそこへ来て与作に借金の返済を迫ったことから八蔵・与作の喧嘩となる。小万は借金の一部を八蔵に返す。
- (エ) 小万の父親は年貢の未納により水牢に服していたが、そ

れを許される代わりに小万が預けの身となる。与作はそれを解決しようと自分を慕う三吉を唆し、金を盗ませる。

(オ) 三吉は本陣の姫君一行の路銀を盗むがすぐに捕まる。

(カ) 駆けつけた滋野井(姫君の乳母・三吉の実母)の取り成しで罪は不問となるが、三吉は武士の子として生きてはいられぬと八蔵の首を斬って罪を重ね、代官所へ渡される。

(キ) 三吉に大罪を犯させたことを悔いた与作は小万とともに死を決意するが、その折、小万が三吉より預かった守り袋を見てわが子与之介と知る。

下之巻

(ク) 「与作小まん夢路のこま」二人は宿外れの千貫松へたどり着く。

(ケ) 与作と小万が刀を抜き最期というとき、徒士衆に止められかつての傍輩匂坂左内に諫められる。

(コ) 姫君の慈悲により、三吉の罪は許され、与作は帰参がかない、小万もお家に引き取られることとなる。人々は「与作をどり」を踊って無事を喜ぶ。

〔淀鯉出世滝徳〕下之巻の筋は次の通り。

(A) 木辻吉田屋であづまを揚げ詰めにしている客の龍田の藤は、あづまを身請すべく懐中した金を亭主に見せる。

「心中天の網島」考

(B) あづまは江戸屋勝二郎を思い泣き沈むところへ、紙衣姿の勝二郎が訪れる。彼は現在の境遇をはかなんで二人して死ぬ覚悟を決めるが、あづまは思案があると勝二郎を一旦帰す。

(C) あづまは藤の懐中の金を盗み殺す。吉田屋の者達はあづまを見つけて縛る。

(D) 勝二郎は再び吉田屋に現れ、あづまが客を斬ったと聞き、自分も同罪だと座す。

(E) 殺された藤の兄が駆けつけるが、兄というのは江戸屋の手代新七であった。新七は弟藤五郎にあづまを身請させようとしていたが、あづまの手にかかって弟が死んだのも一命の奉公だと話し、自分を隔てる主人勝二郎のつれない心を恨む。勝二郎も身の罰を思い、自分を踏みつけるよう新七に泣き詫げる。あづまも自分を刺し殺してくれと歎く。

(F) 勝二郎は八幡の地を返しあたえられ、帰国を許されたことが八幡の神主より伝えられ、一同喜ぶ。

上の二作を比較すると、以下の点でよく似ていることがわかる。

- ① 男主人公はやつし姿で馴染みの遊女を訪れる。(イ・B)
- ② 銀が必要となるが、男主人公にはなすすべがない。

(ウ・B)

③ 男主人公の親しい関係者による盗み・殺人が発生する。

(オ・C)

④ 事実が判明すると男主人公は責任を感じて詫げる。

(キ・D)

⑤ 男主人公は意見の受け手となって、自分の行状を悔いる。

(ケ・E)

⑥ 罪は許され、男主人公は元の身分が約束される。(コ・F)

ところで郡司正勝^⑧は『かぶきの発想』のなかで歌舞伎のやつしのおもしろみは身分が隠れているところにあり、「身分を洗う説き明かしの興味が廓場を中心として戯曲が構成されている」という。浄瑠璃の前二作でも落ちぶれた主人公が彼を慕う遊女のもとへやって来るが、特徴的なのはその場で今の彼の境遇と思慮の無さが原因となって引き起こされた、かつ本人にとっては予測不可能な惨事が組み込まれていることである。

次に「夕霧阿波鳴渡」を考えてみたい。本作ではさきの二作とは違って上之巻の伊左衛門の紙衣姿や夕霧との口説、中之巻の駕籠昇き、そして下之巻の相の山歌いと各巻にやつしの三態を見せている。全体の筋は次の通り。

上之巻 新町吉田屋

(1) 新町吉田屋に、病がちな夕霧が阿波の侍客に呼ばれ揚屋

入りする。

(2) 藤屋伊左衛門も紙衣姿で吉田屋を訪れる。喜左衛門は伊左衛門を迎え入れ、夕霧の座敷をのぞかせる。

(3) 伊左衛門は阿波の客の相手をする夕霧を恨みすねる。夕霧は伊左衛門に悩む身をかこち、彼を胴欲と恨むと、伊左衛門は客の姿を見て腹を立てたと詫げる。夕霧は二人の間の子は阿波の大尺平岡左近の子と欺いて預けたと告げる。

(4) 侍客が現れ自分は左近の妻雪であると名乗り、二人の子を夫の子にほしいと懇願すると、伊左衛門はそれに応じる。雪は夕霧の身請を約束する。

中之巻 平岡左近屋敷

(5) 平岡左近は天満天神から子の源之介と共に上本町の借座敷に戻ってくる。

(6) 腰元たちは雪に夕霧の身請は人がよすぎるといつて止める。

(7) 槍持ちの槌右衛門は女房で飯炊きの竹を台所に伺う。

(8) 馬取りの角介が来て、槌右衛門に貸金の返済を迫る。

(9) 走り出てきた竹は槌右衛門の性悪さを恨むが、自分の裕を角介に渡そうとする。

(10) 腰元おりんが現れ、竹のおかげで奥様のお心が治ったと

告げる。

(11) 夕霧は駕籠昇の伊左衛門や喜左衛門と共に左近宅に着く。

(12) 左近親子は玄闕に客を送って出る。伊左衛門は我が子の姿を見、涙する。夕霧は左近に挨拶し子を見る。

(13) 左近夫婦は喜左衛門に夕霧身請の金子を渡すため奥へ入る。

(14) 夕霧と伊左衛門は子に父様と申うてくれ、母様と申うてくれと頼む。

(15) 怒る左近が現れ夕霧と伊左衛門に倅を返すという。雪が止めるが左近は聞かず奥へ入る。夕霧と伊左衛門は源之介に事情を話すと子も二人をいとしく思う。

(16) 喜左衛門は夕霧を扇屋へ連れ帰る。母と父子は別れて帰って行く。

下之巻 扇屋

(17) 夕霧の病状を気遣う伊左衛門と源之介は相の山となって扇屋の門に立つ。

(18) 扇屋に医者呼び迎えられる。親子は扇屋の招きで相の山を語る。

(19) 扇屋夫婦は伊左衛門に夕霧の心を満足させてくれるよう頼む。親子は夕霧に別れの涙を交わし、夫婦共に髪を切り、

手向けの水を与える。

(20) 雪より夕霧に金が届けられ、伊左衛門の老母妙順よりも金が届けられる。夕霧は源之介にその金を譲る。夕霧を本復させようという姑のことに、夕霧の顔に生気が戻り一同喜び合う。

伊左衛門は紙衣姿で夕霧がいる吉田屋を訪れ、そこで夕霧の口説の受け手となり、子を雪に請われれば安請合いをしようという人のよさを示している。中之巻、やつした駕籠昇姿となつてからは梗概(12)の通りそれまでの自分を省みることとなつた。それに該当する箇所は、

伊左衛門はるかに見て。あれは我子か昔の伊左衛門ならば。人の子になさふか大小こそさ、せず共。あまたの手代若い者若旦那とかしづかせ。京大坂の町人の誰にかは劣るべき。侍とても負けまじき母親の駕籠を父がかき。我子の門に這ひつくばふ我親にそむきたる。其罰ひつしと思ひしり。悔み涙に頬被りの手扨ごひ。ひたす計也。

となつている。伊左衛門が涙した直接的な契機は彼が源之介の姿を確認したことによるが、この展開は前述の「丹波与作待夜の小室節」「淀鯉出世滝徳」二作における作中の出来事(親しい関係者による殺人事件)に比べると描写に広がりがなく単純である。

出来事といえは同じく中之巻で飯炊き竹にまつわる(7)から(9)までの箇所が雪にとって気持ちを鎮め、平常心を取り戻すために役立ったとしている。それまでの雪は身請をすべき夕霧への嫉妬心を抑えることができずにいた。ちょうどそこへ夫を献身的に思う竹の筋を配し、雪にそれを見聞きさせている。ただしその筋は主人公と直接絡み合うものではない。

ともあれ自分の罪に思い至った主人公はその後(17)でさらに相の山のやつし姿となる。このときの彼はもはや吉田屋で見せたような気楽な無能ぶりを披露することなく、ひたすら死の床にある夕霧の心の苦しみを和らげようと、自分の髪の毛まで下ろしてしまう。そして結末ではこれも前二作とは違って伊左衛門の復権が約束されぬまま終わっている。

世話浄瑠璃三作の筋の展開を確認した結果、近松はやつし芸だけでなく、やつしに備わるマイナス面にも焦点を当てることで劇化を図っていたと考えられる。すなわちやつしの主人公はまず馴染みの遊女の許を訪れて、思慮分別のなさを披露している。そしてその後は遭遇する出来事を境にそれまでの自分を省みる。出来事というのはやはり本人の現在の境遇や無知によって引き起こされたものであった。この点をふまえるならば「夕霧阿波鳴渡」におけるやつしの三態もそれぞれの姿は彼を中心とする上述の筋の展開に即して選

び取られたものであったと考えられる。

(三) 治兵衛の登場と出来事

本工作上之巻についても治兵衛の造型と本人が遭遇する出来事を中心に検討してみたい。

紙屋治兵衛が登場するまで、舞台では侍客に呼ばれて河庄へと送られる小春や、彼女のあとを追ってやってきた太兵衛、そして侍客をもてなす花車といった人物が次々と登場し、皆それぞれ治兵衛のことを話題にする。茶屋では彼のことを「紙治様」といつて話すが、小春を張合う客の太兵衛は徹底的に侮辱して「紙屋の治兵衛。小はる狂ひが杉原紙で。一步小判紙ちり／＼紙で。内の身代すき破れ紙の。鼻もかまれぬ紙くず治兵衛。」などとわめきちらす。注目される男主人公はこの後しばらくして次の詞章で登場する。

天満に年経る。ちはやふる。神にはあらぬ紙様と世の鰐口にのる計。小春に深くあふ幣の鎖り合たるみしめ縄。今は結ふの神無月。せかれて会はれぬ身と成はて。あはれ逢瀬の首尾あらば。それを二人が。最期日と。なごりの文の言ひ交し。毎夜／＼の死覚悟。玉しるぬけてとほ／＼うか／＼身をこがす。

治兵衛の登場に際して「紙」という言葉が数多く使用されていることはすでに信多純^⑨によって指摘されているところである。ただ

し信多はその場の「紙」だけでなく作品中の「紙」「髪」「神」という掛詞と「紙」の縁語の「文」、また「文」の掛詞である「踏」に注目し、これらを作品のキーワードであるという。

筆者は男主人公が曾根崎の茶屋で「紙くず治兵衛」「紙治様」「紙様」などといわれ、なおかつ馴染みの遊女のために「玉しゐぬけて」という頼りない体で登場している点に注目したい。人形遣い吉田玉男^⑩はこのときの彼を「色に迷って尋常でない」「やつし」の性格になって現れ、人形の首も、それに合わせて目の動きがない、スッキリした表情の源太首を使っております」とのべている。只今も商人である治兵衛は、やつしそのものではない。が、彼を「紙」として指し示し、それを集中的に語るのは廓場のやつしに特徴的な紙衣を連想させるためではなかったか。

さて河庄を訪れた治兵衛がそこで耳にしたのは小春本人による裏切りの言葉であった。彼は茶屋の外に忍んでいたが、彼女はそれを知らず侍客に対して「水臭ひ女と思召も恥しながら。其恥をすて、死に共ないが第一。死なずに事のすむ様にどうそく頼やす」などと泣きながら告げている。それを治兵衛が偶然立聞きしてしまうのである。加えて後にはその侍客が兄孫右衛門であったこともわかってくる。

最初は我が恋のため魂の抜け殻のようであった治兵衛だけに今知

る愛想尽しは本人に大きな揺さぶりをかけるようである。その過程を確認しておきたい。彼はまず次の通り自分が騙されていた事実突き当たる。

外にははつと聞おどろく。思ひがけなき男心木から落たること
くにて。気もせき狂ひ扱は皆うそか。エ、腹の立。二年といふ
物ばかされた。根性腐りの狐め。踏ん込で一打か面恥か、せ
て腹居よかと。齒切りきりく口惜し涙。

その後彼は次第に激昂してゆく。そして「立聞治兵衛が気も狂乱」という状態になると自分の小脇差を抜き小春をめぐけて格子越しに突つ込む。しかしそれは届かず、両腕はそのまま侍客によつて縛り付けられてしまった。その時の様子は「格子手枷にもがけば締めまり。身は煩惱につながら、犬におとつた生恥を。覚悟きわめし血の涙絞り。泣こそ不便なれ。」と同情的に描写しているが、その後もやってきた太兵衛により辱めを受けてしまうのである。

治兵衛はこうして徹底的にうちのめされるところまでゆくが、さらに初めてここで正体を明かす孫右衛門から意見を受けている。意見のせりふは長く内容は諏訪春雄^⑪がすでに『心中——その死と真実』で分析する通り情理を尽くしたものとなっている。一部を紹介する。

孫右衛門。ヤイくく。其たわけから事おこる。人をたらす

は遊女の商売。今日に見えたか。此孫右衛門はたつた今一見にて女の心の底を見る。二年あまりの馴染の女。心底見付ぬうろたへ者。小春を踏む足で。うろたへたおのれが根性をなげ踏まぬ。エ、ぜひもなや。弟とはいひながら三十におつかり。勲太郎お末といふ六ツと四ツの子の親。六間口の家踏みしめ。身代つぶる、わきまへなく。兄の意見を受くことか。(中略)おのれが病の根元見届くる。女房子にも見替へしは尤。心中よしの女郎。ア、お手柄。結構な弟を持。人にも知られし粉屋の孫右衛門。祭の練衆か気違ひか。つゐにさ、ぬ大小ほつこみ。蔵屋敷の役人と。小話役者のまねをして。ばかをつくした此刀。捨て所がないわいやい。小腹が立やらおかしいやら。胸が痛い。と歯ぎしみし。泣顔かくす洗面に小春は始終むせかへり。皆お道理と計にて詞も。涙にくれにけり。

対する治兵衛は「大地をた、いて」兄に謝るのであるが、それに続く彼自身の述懐の中身は「三年先よりあの古狸に見入れ。親子一門妻子迄袖になし。身代の手纏れも。小春といふ屋尻切にたらされ後悔千万。ふつつり心残らねば尤足も踏込まじ」という通り、小春に騙されていたという被害者意識と女への非難で埋め尽くされている。孫右衛門の訓戒は治兵衛をして自分自身の無分別を後悔させるものとはならなかった。

ところが続く場面で小春の愛想尽しには実は裏があったことが孫右衛門に示されている。彼女は女房おさんからの手紙を男の起請文とともに大事に懐中していたのである。偶然それを発見した孫右衛門は嘆き悲しむ彼女に対して感謝のことばをのべ、そのまま何も知らない弟を連れて立ち去ってゆく。退場の詞章は、

わつと泣出し兄弟づれ。帰る姿もいたく敷跡を見送声をあ
げ。なげく小春もむごらしき。不心中か心中か。誠の心は女
房の其一笔の奥深く。誰がふみも見ぬ恋の道わかれて。こそは
かへりけれ。

と裏切った小春と裏切られたと思う治兵衛、双方の嘆きの様子を描きつつまたおさんの手紙にも焦点を当ててゆく。ゆえに観客は問題の真相がやがて開示されるときのことを予測しながら治兵衛の流す涙の行方を見守ることとなる。

治兵衛の造型と出来事を中心に上之巻の筋の展開を検討した。結果治兵衛はやはり世話浄瑠璃のやつし的主人公との関わりが深いといえそうである。やつし的主人公である与作・勝二郎・伊左衛門に關しては前節で述べた通りである。治兵衛もまたそれら男主人公たちと同様、頼りない体で河庄を訪れていたが、そこで思いもよらぬ出来事に遭遇して徹底的にうちのめされてしまい、兄の意見の受け手ともなっている。ただ上之巻では彼は自分の無分別を省みること

はない。中之巻以降においてその点を確認したい。

(四) 治兵衛を取り巻く第二、第三の出来事

中之巻冒頭は治兵衛が住まう紙屋を紹介するところから始まって
いる。ここでの詞章も上之巻における彼の紹介箇所と同じく、

福徳ふくとくに。天満神あまみろの名をすくに天神橋あまのきしと行通ふ。所も神のお前町
いとなむ業わざも紙見世に。紙屋治兵衛と名を付て千早ちはやふる程買か
に来る。かみは正直商売ちかじやうばいは所がらなり老舖しよにせなり。

とまず「紙屋治兵衛」の名前を告げる。当の治兵衛は「炬燵こたすにうた
ゝ寝ねを枕屏風びやうぶで風かぜふせぐ」という体であり、女房だけが「見世と
内うちとを一ひと縮ひぢに。女房おさんの心くばり」と気ぜわしく働いていた。

そこへ孫右衛門と叔母おさんにとつては母親に当たると訪れ
る。二人は天満の大尺おさんが今日明日にも小春を身請するといふ評判を
聞きそれは治兵衛のことではないかと確かめによつてきたのであつ
た。対する治兵衛は話の大尺は太兵衛のことであり、身に覚えは無
いと弁明する。そして兄に誓紙を要求されると「何が扱千枚でも仕
らふ」と調子よく請合つて熊野の牛王の札に誓いの文言をしたため
血判を据えて差し出すのであつた。

兄と叔母が安堵して帰つてゆくと彼はまた元の通り炬燵布団をか
ぶつて横になつてしまう。しかも今は「枕につたふ涙の滝身たきみも浮うく

計泣かるたる」という状態であつたため意を決したおさんによつて激
しく詰め寄られることとなる。その場面は次の通り。

引き起し引立炬燵こたすの櫓やぐらに突据つきすへ。顔かほつくくど打ながめ。あん
まりしや治兵衛殿。それ程名残なごりおしくば誓紙せいしか、ぬがよいわい
の。一昨年おとしの十月中の亥みの子に炬燵こたす明た祝義いそぎとて。まあ是こ、
で枕まくらならべて此方かた。女房の懐ふところには鬼おにがすむか蛇へびがすむか。二
年といふ物巢すも守りにしてやうく母様ははおち様のおかけで。むつ
まじい女夫めとこらしい寝物ねもの語かたごもせう物と。たのしむ間もなくほん
に惨あはいつれないさ程心残こころなごりらば泣なかしゃんせく。其涙なみだが蜷川しづがは
へ流ながれて小春はるの汲くんで飲のみやらふぞ。エ、曲まがもない恨うらめしや
と。膝ひざに抱いだき付身つけみをなげふしくどき。たて、ぞ嘆なげきける。

しかし夫は目の前で口説き泣く女房の苦惱に思ひいたることはな
い。答えて彼が述べたことばは、

(小春は) 太兵衛には請出かたされぬもし銀櫃かねびで親方おやから遣やるなら
ば。物の見事ことに死んで見しよと。たびく詞ことばを放はなちしがこれ見
や退のいて十日もた、ぬ中。太兵衛めに請出かたさる、腐くさり女の四ツ
足あしめに。心はゆめく残のこらね共。太兵衛めがいんげんこき。治
兵衛身代みんだいいきついでの銀ねにつまつてなんど。大坂中を触かれ廻まわ
り問屋もんや中の付合あひにも。面おもてをまぶられ生恥いきぢかく胸むねがさける身みが燃も
る。エ、口おしい無念むねな熱あつい涙血なみだちの涙。ねばい涙なみだを打うつこへ熱鉄あつてつ

の涙がこぼる、とどうと伏して泣ければ。

という通り自分の流す涙の理由でしかない。この会話文が小春への絶ちがたい未練に貫かれた自己本位のことばであるというのは衆目的一致するところである。治兵衛は口説の受け手となりながらただ拗ねるのみであり、彼の無知、無能ぶりはここで徹底的なものとなつて表れた。

治兵衛はそこで思いがけないおさんのことばを耳にする。それは前掲の夫のことばから小春が死ぬ覚悟でいたことを知ったおさんが自分から打ち明ける大事の秘密——夫の命を救うため小春に手紙を書いて協力を頼んでいたこと・小春は偽の愛想尽しをしていたこと——であった。しかも彼女は「ア、悲しや此人を殺しては。女同士の義理た、ぬ」といつて夫に遊女を請出してくれるよう頼み、その身代となる銀の一部と、銀に換えるべき着物をすすんで用意しそれを夫に持たせるのである。

「女同士の義理」をめぐるおさんの一連の行動に関して、先学は女二人の間らしい結びつきが描かれたと見て高く評価している。しかしまた、その行動は何も知らない男主人公の側からすれば遊女の心中が確実に証明されるための手段となつていることも明らかである。治兵衛はおさんの告白と義理立てを通して思いもよらぬ小春のまことに行き当たったといえる。

さすがの治兵衛もこの出来事には大きく動揺した。その後は小春の命を夫に託そうとするおさんと治兵衛が向き合うこととなる。そのときの夫婦の対話を見ると次の通りである。

わたしや子共は何着いでも男は世間が大事。請出して小春も助け。太兵衛とやらに二分たて、見せてくだんせと。言へ共始終さしうつむきしく泣てあたりしが。手付渡して取止め請出して其後。囲ふて置か内へ入る、にしてから。そなたは何と成ことぞと言はれてはつと行当たり。アツアそうじや。

引用文中の「しく泣てあたりしが」の箇所は動作主が明示されていないため、おさんか治兵衛かで解釈が分かれている。先学たちの解釈についてはすでに山根為雄^⑩が「『心中天の網鳥』雑感——節章と解釈——」で詳述し、山根自身は接続助詞「が」で終わるフシ落ちの箇所の動作主体と次の言葉の話者は同一人物であるとしてそれを根拠に「しく泣てあたりしが」の主語を治兵衛であるという。筆者は後述する通り、治兵衛がやつし的主人公であると目されることからこの箇所は無分別な男がおさんの動作に対する受け手となつて、何もせずにただ泣いていたと考える。

夫はおさんを前にして「しく泣いていた。が、告げたことばは身請け後のおさんの居場所についてであった。大久保忠國^⑪はこの身請けは「太兵衛の手から救い出すためなので、小春を妻と

し、おさんを捨てることは意味しない筈である」として会話文そのものの矛盾を突いているのも解釈として納得される場所である。

ともかく治兵衛はならん役立つ発言ができず、もちろん肝心の銀を工面することもできずに遊女の身請けが急務となる事態に直面する。したがって彼はおさんに「あまりに冥加恐ろしい此治兵衛には親の罰天の罰。仏神の罰はあたらず共女房の罰一ツでも将来はよかないはづ。許したもれと手を合くどきなげ、は」と詫びるしかない。そのまま身なりを整えようと遊女を請出すべく出てゆこうとした。

ところがここで治兵衛は再び重要な出来事に遭遇している。治兵衛の行動を危ぶんでいた舅五左衛門がやって来て、彼に向かつておさんへの去状を要求する。その後娘の道具がすでに売り払われていたことがわかると舅は「ヤイ治兵衛女房子共の身の皮はぎ。其銀でおやま狂ひ。いけどう掬摸め」などと罵倒のことはを発して執拗に去状を求めた。対する治兵衛は舅の要求を拒否するもののおさんを留め置くにすすべがない。五左衛門は母親にすがりつく子供二人を残しておさんを無理やり連れ去ってしまった。

おさんの処遇をめぐるとの出来事に関してこれまでの研究ではおさんの努力が水泡に帰すること、治兵衛小春による心中への道が用意されたことを重視している。

たしかに治兵衛には心中という結末が待ち受けている。しかしおさんが父親に連れ去られた原因は一にかかつて不明な夫にあった。これまでの経過から考えるならば上述の事実に行き当たった彼にその後どのような変化がもたらされるかがまず注目される。

前節でも確認した通り彼は最初から常に分別に欠ける頼りない人物であったが、第一に小春による愛想尽し、第二におさんによる告白と彼女の小春への義理立て、そして第三に子別れを余儀なくされるおさんの苦悩という三つの出来事に遭遇している。しかもその展開は男主人公を介しながら真相の開示へと向かってゆくものであった。事情をすべて知る観客は肝心の治兵衛の心の行方を見守ることとなるが、しかしそれについては中之巻で明かされることなく次の巻へと持ちこされている。

(五) 治兵衛の自覚と心中

下之巻は茶屋大和屋より始まる。治兵衛はすでに太兵衛への身請けが決まった小春と会っていたが夜更けに彼女を残して茶屋を出、帰ると見せて物陰に隠れた。ちょうどそこへ孫右衛門が三五郎に勘太郎を背負わせて治兵衛を探しにやって来、「舅の恨に我身をわすれ。無分別も出やうか」などと弟の身を案じ、やがてまた行方を探して立ち去って行く。治兵衛はその様子をじっと伺っていたが、こ

こで、

影へた、れは駆け出て。跡なつかしげに伸び上り。心に物を言
わせては。十悪人の此治兵衛。死に次第共捨おかれず。跡から
跡迄御やつかい。もつたいなやと手をあはせ。伏し拝みく猶
此上のお慈悲には。子共がことを計にてしはし。涙にむせひ
しが。とても覚悟を極めしうへ。小春や待たんと大和屋の。
とのべている。

その会話文に関して先学は彼も勘太郎のいたいな姿を見ては親
の愛情や責任を痛感せざるを得なかつたが、それをふりきつて心中
へ向かうと説明している。

しかしまた、上・中・巻において治兵衛がまつたくの不明な人物
であつたこと、なおかつ前節で確認した出来事の原因が男にあつた
ことを考えるならば、本人の「十悪人の此治兵衛」という会話文が
注目されるころである。

続く場は治兵衛が大和屋を脱出した小春とともに最期場を求めて
歩み行く道行「名こりの橋づくし」となる。冒頭は、

走り書。謡の本は近衛流。野郎帽子は若紫。悪所狂ひの。

身の果は。かく成行と。定まりし。釈迦の教へも有ることか見た
し憂き身の因果経。明日は世上の言種に。紙屋次兵衛が心中
と。あだ名ちり行桜木に。ねほり葉ほりを絵草子の。版摺る

紙の其中に有共しらぬ死神に。さそはれ行も商売に。うとき
報ひと観念も。とすれば心ひかされてあゆみ。なやむぞ道理
成。

と、やはりまず紙屋治兵衛について語り出している。

さてその道行は幕開きの最初から男女が天神橋の北側の袂に位置
して立ち止まる。男はそれまで二人で歩いてきた梅田橋・緑橋・桜
橋・蜷橋・大江橋・難波小橋・舟入橋を西から順に振り返つた。そ
の後二人は橋を南へと渡ると彼岸を思い、未来に願いをかけながら
大和川にかかる天満橋・京橋へと移動し、さらに御成橋を渡つて最
期場となる網島大長寺にたどり着いている。

橋尽しである道行の起点がその行程途中から始まる点に最初に注
目したのは祐田善雄である。祐田は天神橋にいたるまでの連想とそ
の橋での現実を交差させた表現技巧であるとし、ここでは身の破滅
に追い込まれた二人の苦悩を吐露するクドキが巧みに表現されたと
説いている。廣末保はまた天神橋という地点を最初に出してきた理
由をとくに問題とし、その地理的位置（西に曾根崎新地、北には紙
屋がある）に注目して道行の最初の場面では日常的時間に終わりを
告げようとする男の回想と断絶感が描かれているという。

筆者はその回想のことに注目したい。彼の回想箇所には来し方
やこれまでの日々営みについてのみならず、

(a) 死神に。さそはれ行も商売に。うとき報ひと観念も。と
すれは心ひかされてあゆみ。なやむぞ道理成。

(b) か、る尊き荒神の。氏子と生れし身を持て。そなたも殺
し我も死ぬ。もとはと。問へは分別のあのいたいけな貝殻に。
一杯もなき蜷橋。

(c) 北へあゆめは。我宿を一目に見るも見返らず。子共の行衛
女房の。哀れも胸におしつ、み。南へ渡る橋柱

という詞章が組み込まれている。男は(a)商売と、(b)目の前に
いる小春に対して分別なき自分を省み、(c)の通り不幸せな女房・子
供に思いをいたすとその後初めて天神橋より歩みを進めた。彼の自
覚のことばについては前の大和屋の場で確認したが、この橋での感
懐はそれと結びつくものである。まず天神橋を舞台とし、男に焦点
をあてて語り出す設定は彼が無分別の罪を詫びるという点を象徴的
に印象づけるためのものと捉えることができる。

結末は、治兵衛が女を樋の上で刺し殺したあと、自分は場所を変
えて樋の上の組木で首をくくって果てるが、その死に場所を決める
までに時間を費やしている。

最期場ではまず小春がおさんと取り交わした手紙の持ち出し
して、おさんへの義理を立てるため場所を変えて死にたいという。
男はそんな義理立ては無用であるとのべ、さらにその後自分の黒髪

を元結際より切つて、

は見や小春。此髪の有ル中は髪屋治兵衛といふおさんが夫。

髪切たれば出家の身三界の家を出。妻子珍宝不随者の法師。お
さんといふ女房なければ。おぬしがたつる義理もなしと涙なが
ら投げ出す。

と小春を氣遣うのである。

女も男にならつて投鳥田を切つた。すると出家姿の男は女にむか
つて、

浮世を逃れし。尼法師。夫婦の義理とは俗の昔。とてもこの

とにさつはりと死に場もかへて山と川。此樋の上を山になぞら
へそなたが最期場我は又。此流れにて首く、り最期は同じ時な
がら。捨身の品も所をかへておさんに立ぬく心の道。その抱
帯こなたへと

と今度はおさんを氣遣うことばをのべている。こうして二人は別々
の場所で死ぬこととなったが、これからという時この肝心の点につ
いてなぜか治兵衛のことばは容易に転ずる。

祐田^⑩はその箇所を評価し、作品全体が二人の女性の真心に焦点を
合わせたものであるとの観点からあくまでもおさんへの真心を披露
するすばらしい小春の性格と、その場限りの表面的な形式論でこと
をすまそうとする治兵衛の性格が対照的に相違しているという。一

方、廣末^②は主人公の葛藤や行為を重視して、治兵衛は小春のために自分のためにも最後まで現世での絆、現世での義理を断ち切ろうとしたが、おさんへの義理からは解放されるわけではなかったとして、男の足掻きのあわれさを読み取っている。

筆者はここでも下之巻より示された治兵衛の自覚のことばをもとに考えたい。不明を詫げる男主人公はこれより殺さねばならない小春を思いやると同時におさんへの義理にひかれるのである。男は二人の女のまことに押しつぶされ一人死んでゆかなければならないとした。このような治兵衛の苦悩を描写するには、小春がなおもおさんとの「女同士の義理」を具体的に告げる会話文が重要であったといえる。また結末での「暫^{しばし}くるしむ。生^{なりひこ}飄^{ひこ}風^{かぜ}にゆらるゝことくに」という縊死の姿はそのような彼の孤独とはかなさを美しく描写したものと考えられる。

(一六) まとめ

本稿では、男主人公治兵衛がおさん・小春と比較して描けているか、否かという疑点をとりあげ、その答を見出すため、まず治兵衛に直接かかわると見られる与作・勝二郎・伊左衛門というやつしの主人公の特徴を検討するところより始めた。

先行する世話浄瑠璃では、やつしの主人公は落ちおれた姿となっ

て馴染みの遊女の許を訪れ、そこで持ち前の無知・無分別を披露する。しかしその後は遭遇する出来事をきっかけとしてそれまでの自分を省みることがわかった。そのなかで語られる出来事とはやはり彼の分別のなさや現在の境遇のつたなさが原因となって引き起こされたものである。

そしてこの特徴を本作の治兵衛と照らし合わせたところ、彼はそのやつしの主人公と同じ系譜に位置する人物であることを確認した。河庄の場で登場する治兵衛を「紙（かみ）」ということばで指し示しそれを強調しているが、それはやつしにつながる紙衣を連想させるためのものではなかっただろうか。中之巻や道行の最初でも紙屋治兵衛の名を取り上げ男主人公の紹介から語り出していた。

さて本作で語られる重要な出来事というのは「女同士の義理」をめぐって表されたものであって、三つを数える。第一は上之巻の小春による愛想尽し、第二に中之巻におけるおさんの告白と彼女による小春への義理立て、そして第三は中之巻最後の五左衛門によるおさんの連れ去りとなっている。その一つ一つはやはり治兵衛の思慮分別のなさが原因で引き起こされたものであり、真相の開示へと向かうものである。

唯一不明な男主人公は小春やおさんの苦悩や愁嘆を目の当たりにし、判明してゆく事実^③に翻弄されねばならない。すなわち河庄の場

では小春の不心中に打ちのめされ、逆に紙屋の場となってからは彼女の心中に大きく動揺し、ついにはおさんの災禍にゆきあたる。そして下之巻は大和屋の場となってようやく分別のなさを罪として自覚することとなった。

つまり近松は世話浄瑠璃で描いていたやつしの主人公の特徴を十分に生かしつつ、それをもとにさきの三つの出来事を段階的に組み込むことで劇化を図っている。治兵衛が自覚した後は、引きつづき彼の苦悩の道行や縊死の姿にまで光を当て、深いレベルでの人間の孤独を描き出そうとした。

※ 近松浄瑠璃の本文引用は、岩波版『近松全集』による。適宜、漢字を宛て、仮名の清濁を改めたほか、節章はすべて省略した。

※ 注記した先行研究の引用に際し、旧字体の漢字はすべて現行の字体に改めた。仮名表記は原文のままである。

注

- ① 重友毅『近松の研究』『心中天の網鳥』の解釈 文理書院、一九七二年。
- ② 廣末保『近松序説』『心中天の網鳥——展開その三——』未来社、一九五七年。同『古典を読む 心中天の網鳥』岩波書店、一九八三年。引用は『近松序説』による。
- ③ 白方勝『近松浄瑠璃の研究』三―四「家の悲劇」風間書房、一九九三年。白方は人妻と遊女の関係に的をはずして論じており、義理と治兵衛

の問題に関しては次の通りのべている。

女同士の義理にしても、それを守ろうとするのは、相手に対する人間的な責任感からであって、単なる義務的行為ではない。「心の道」の義理を生きたことへの疑問や反省は、第三者的な治兵衛には存在しても、おさん小春にはない。人間的責任への純粹な気持が二人を結んでいる。

- ④ 近松座歌舞伎「心中天の網鳥」の上演年は一九八二年、一九八六年、一九九二年、二〇〇一年であった。三代目中村鷹治郎「近松と私」近松研究の実践の場としての「近松座」『新日本古典文学大系 月報六四』岩波書店、一九九五年十二月など。
- ⑤ 中村鷹治郎・原道生対談『曾根崎心中』をめぐって——近松を演じて——『国文学 解釈と教材の研究 近松——人形浄瑠璃と歌舞伎の劇場空間——』二〇〇二年五月。
- ⑥ 原道生は「やつし」の浄瑠璃化——煙草売り源七の明と暗——『文学』一九七五年六月で、「やつし」の主人公である『丹波与作待夜の小室節』の伊達与作の造型を分析し次の通りのべている。
氣のよさ、色好み、世間知らず等々といった、いわば現実社会への適応性の欠如によって、与作は次々と破綻する。しかしながら（中略）そうした不適応性こそが、「やつし」の主人公に許された特質であり、女たちの献身を呼び出して来る最大の美点ともされていったのではなかったか。
- ⑦ 原道生、注⑥に同じ。
- ⑧ 郡司正勝「かぶきの発想」『戯曲の発想』名著刊行会、一九七八年。
- ⑨ 信多純一「作品解釈の問題点——「心中天の網鳥」——」『岩波セミナーブックス 近松への招待』岩波書店、一九八九年。信多は本作の主題について次の通りのべている。

男は水門の樋の上から、南無阿弥陀仏と踏み外し、生瓢の風にゆれるように苦しみながら縊死した。この作は一生を踏外した男の物語である。作者近松は言葉の同音異義の効果を最大限に用いる。踏は文でもある。男の商いは紙屋であった。紙の縁語に文がある。紙商いの道を踏外し、商売を疎んじ、分別を失ったその報いの死でもあった。(傍点〓信多)

⑩ 『NHK日本の伝統芸能』「吉田玉男さんに聞く——少ない動きで感情を表現——」日本放送出版協会、二〇〇四年四月。

⑪ 諏訪春雄『心中——その死と真実』「家と個人」毎日新聞社、一九七七年。

⑫ たとえば、重友毅『近松の研究』(注①に同じ)、廣末保『近松序説』(注②に同じ)など。廣末は「世話悲劇」論という観点から「女同士の義理」について次の通りのべている。

この時、おさんは妻の座から「茶屋者」としての小春に対しているのではない。対等の女同士として対している。それは、おさんの頼みを聞き、それゆえ、いまは死のうとするその小春の人間によつて突きあげられているからである。それは、小春が突きあげてくるものである。だがまた、それを、「女同士の義理」によつてうけとめるおさんの人間があつてはじめて起る劇的な葛藤である。(傍点〓廣末)

⑬ 山根為雄『「心中天の網島」雑感——節章と解釈——』『女子大国文』一一一、一九九二年六月。

節章については次の通りである。
 言へ共始終さしうつむさしく泣てあたりしが。

⑭ 大久保忠國『評釈国文学大系 近松集』河出書房、一九五六年。

⑮ このことに関して伊藤正雄『心中天の網島詳解』(富山房、一九三五

年)、廣末保『近松序説』(注②に同じ)、白方勝(注③に同じ)で解釈が示されている。

伊藤は男主人公の心理を取り上げ、小春を請出すことができない絶望感、太兵衛に対する意地立て、おさんを失った寂寞の情と、五左衛門の冷酷なる仕打ちに対する憤懣という感情が、本来熱し易く狂し易い彼の天性を駆つて、情死への途をたどらせたと解釈している。廣末は五左衛門による家の崩壊には客観性があること、おさんの努力が水泡に帰することを説いたうえで、それ以降の治兵衛の心中の行為を重視している。

また白方は「本作は、夫の放蕩による家の崩壊劇」であると見てそれが五左衛門によつて決定的となったという。

⑯ 治兵衛の述懐に関してたとえば廣末保は『近松序説』(注②に同じ)で次の通りのべている。

解決しようのない悲劇的矛盾を解決しようとする孫右衛門は、それゆえに、一層悲劇的である。そして、この場の孫右衛門が悲劇的にみえればみえるほど、治兵衛・小春・おさんの悲劇も深まるという関係が、そこになりたつ。だが、孫右衛門と勘太郎の悲劇的な姿は、治兵衛の決意を、もはや拘束しない。

また祐田善雄は『全講心中天の網島』(至文堂、一九七五年)のなかでその述懐を評して「子供とともに、心をかすめたに違いないおさんへの思いやりを追払うように」「とても覚悟を極めし上は」と、心中の決行へ自身の気持を向けてしまふ」として決意に目を向けている。

⑰ 祐田善雄、注⑬に同じ。

⑱ 廣末保『古典を読む 心中天の網島』(注②に同じ)。

⑲ 祐田善雄、注⑬に同じ。

⑳ 廣末保、『古典を読む 心中天の網島』(注②に同じ)。廣末は治兵衛の足掻きのあわれさを指摘するが、この解釈は同書で説明するとおり、

中之巻切で五左衛門に「去状書け」とせまられたときのおさんと治兵衛の心の絆をもとにして導かれたものであろう。廣末はその箇所を解釈して次のようにのべている。

治兵衛は咄嗟に「添はねばならぬ」と決断する。おさんに大恩があるからである。だがそれは大恩があるから自分の情に反してもということではなかった。治兵衛はおさんの思いやりを身にしみて感じていたし、何よりも、自己矛盾の苦痛に喘ぎ喘ぎ耐えることによって、二人は固い絆で結ばれていた。「添わねばならぬ大恩」ということがそこから出てくる。